



膨大な文献考察と一流医師の英知が詰まった本書から答えを見出す

評者 増井伸高 札幌東徳洲会病院救急センター部長

救急外来はギモンでごった返している。

「敗血症性 AKI（急性腎障害）を併発している患者への造影 CT は？」

「ビタミン B₁ はどの程度投与すればいいのか？」

「急性虫垂炎と診断したら、抗菌薬投与で一晩経過をみてもよいのか？」

これは本書のギモンのごく一部。答えがないため「controversy（議論の及ぶところ）」と表現されるやつだ。書籍ではこうした ER のギモン、controversy を 159 個もピックアップ。ここまで多いと潜在意識のギモンまで言語化していることになる。

参考文献数はなんと 1,100 本

本書では 159 個すべてのギモンに対し文献考察をしている。その徹底ぶりには驚かされた。controversy とお茶を濁さず、実直にギモンへ向き合っているのだ。その姿勢は参考文献数 1,100 本という数字が証明している。分担執筆とはいえ、よくもまあ調べてある。

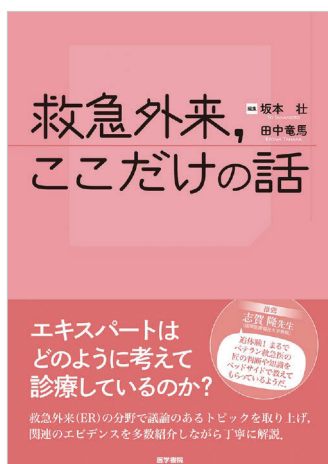
この文献数は日本語の救急医学の書籍としては最高峰だ。若手医師が勉強会で文献を調べる時に最初にひもとく本としてはベストチョイス、あるいは上級医が文献をひけらかす虎の巻にもなるだろう。本書からの引用だとバレなければ、読者は“文献マエストロ”と思われるに違いない。

そして情報量がこれほど多いのに定価 5,720 円（本体 5,200 円）という値段。最高にコスパの良い医学書だ。情報量が多いので B5 サイズ 480 ページ、1,035g とボリューム満点でさすがに白衣に入らない。そこで救急外来に 1 冊、自分の机に 1 冊、カンファレンスルームに 1 冊ずつ買っておくのがオススメだ。あるいは電子書籍版を「医書.jp」（<https://store.isho.jp>）で契約・携帯するのもスマートだろう。

∞（無限）のなかから答えを見出す

文献のじゅうたん爆撃でもわからないことはある。それでもベッドサイドで方針は決めないといけない。その点は各スペシャリストが「（不明点はあるが）わたしはこうしている」と真摯に述べている。徹底的に文献考察しているので、たとえ経験論でもコメントに含蓄がある。本書のギモン解決法を読者はきっと実践したくなるだろう。あるいは解決法が自分と同じ方法なら、「このままでいいんだよ」と優しく背中を押してくれるだろう。

controversy なギモンに対する答えは医療施設ごと、患者ごとに違う。本来その数は∞（無限）で、答えに詰まることもあるだろう。しかし膨大な文献考察と一流医師の英知が詰まった本書であれば、すべてのギモンに答えを見出すことも可能だ。『救急外来、ここだけの話』は近い将来に全国の救急外来に広がり、ここだけで終わらない話になるだろう。



救急外来、ここだけの話

坂本 壮、田中竜馬＝編

定価：5,720 円
B5・480 頁／医学書院／2021
[ISBN978-4-260-04638-1]